

# 防災啓発をオリジナルの『体験型』で企画して地域へ！！ ～地域みんなでバリアフリーの防災対策を～

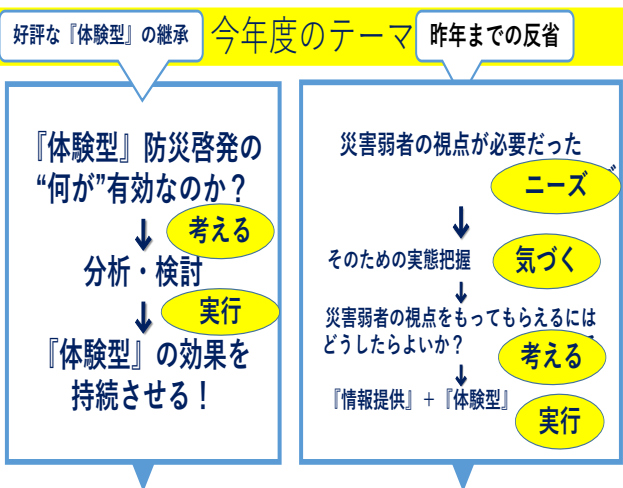


災害が起きたとき、平田高校には全校生徒の12倍の、5千人もの被災者が押しかけてきます。その時に、まずは自分たちが命を助けることができるように、資格取得や多くの研修を積み重ね、そのノウハウを「全校生徒」へ「地域の方々」へと広げ、その啓発企画を自分たちで『主催』できるまでになりました。

しかし「知らせる」だけでは数か月後には災害に対する意識が下がってくるため、「危機感」をもってもらえるような『体験型』に改善しました。

## ～今年度のテーマ～

今年度は2つのテーマを同時進行しました。1つ目は、先輩たちが築かれた『体験型』の効果を持続させることです。2つ目は、『災害弱者の視点』を盛り込むことです。そこで、実態把握をして、気づき、考え、「現状をリアルに想像してもらえようような情報を提供する活動」と「体験型活動」を行うことにしました。



聴覚障害者が災害時に困ることって? <https://grapee.jp/170580>

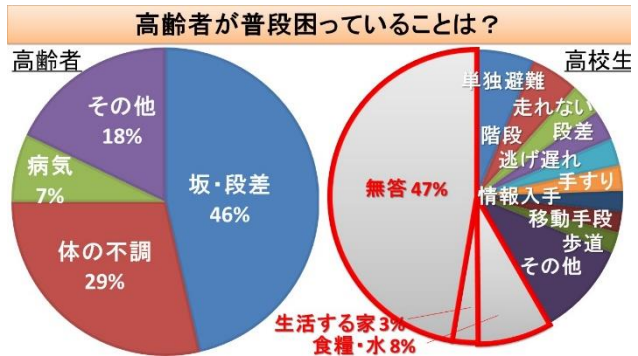
## ～ 体験学習設定理由 ～

この絵を見て想像してみてください。

もし、聴覚や発声に障がいのある方が被災された場合、助けを求める手段が限られてしまい、救助が遅れたり、助けられたはずの命が助けられないといった事態が想定されます。そこで私たちは、障がい者体験学習を通して、災害時だけでなく、日常生活の中でも困る事はないか、検証してみることにしました。

## ～ 意識調査の結果 ～

模擬体験を行う前に、高齢者に対して「普段困っていること」、高校生に対して「高齢者が普段困っていると推測できること」というアンケートを実施しました。その結果、メディアや授業など様々な場面で高齢者に関する問題が取りあげられているにもかかわらず、約半分の高校生が無答＝「高齢者の困っていることが分からない」という残念な結果が出ました。災害が起きてからでは遅いのです。起こる前から、自分たちのことだけでなく高齢者をはじめ、災害弱者となりうる周りの人たちのことも考える必要があります。



## ～ 体験型活動の例 / 障がい者体験 ～

障がい者体験では、危険から逃げるどころか前に進むことさえ怖く、誰もが苦勞しました。アイマスクによって前が見えず障害物に当たったり、前に人がいることに気づかずぶつかったりしました。階段では自分の感覚で上り、下るときは段差を足で確認してから歩きました。関節を固定すると、膝を思うように曲げることができず、バリアフリーの大切さを体感することができました。

## ～まとめ～

情報提供や弱者体験などの前後に、高校生からアンケートを取りました。

事前のアンケートでは、災害弱者についての理解が不十分な人もいましたが、事後のアンケートからは様々な状況にある人たちが、災害弱者であることを理解してくれたことがわかり、私たちも嬉しくなりました。

多くの人が知識と対応力を身に付けていれば、たくさんの命が救われます。「リアルな情報」と「体験」を広めていくとよいことがわかりました。これからも色々な角度から、『命』について考えていきたいと思ひます。

